

<通 信>

コッホは第一ボタンをかけちがえたか
—島村喜久治先生へ—

戸 井 田 一 郎

結核予防会結核研究所

受付 昭和 55 年 11 月 7 日

敬愛する島村先生、大阪の第55回総会での先生の特別講演を拝聴して強い感銘を受けました。学術講演では滅多にないことなのですが、あのときは、素晴らしい音楽を聴いたあのような興奮をすら感じました。「結核 第55巻第8号」誌上で再読し、あらためて先生の鋭い分析と深い人間性にうたれました。しかし、それとともに、総会会場ではぼんやりと感じたにすぎない違和感がはつきりした形になってきました。

コッホは本当に「第一ボタンをかけちがえた」のでしょうか。第一ボタンのかけちがえという表現は、そもそも原理的に、方法論的に、誤つた道に踏み込んだ場合に使う言葉だと思います。感染症の治療には、病原菌を直接的に攻撃する道と、病原菌と宿主の関係を宿主の有利な方向へ修飾する道とがあるわけですが、どちらの道も原理的には正当であり、どちらの道を選ぶかは病気の種類と、その時代の合成化学・製薬技術をはじめとする科学・技術一般の進歩の段階とによつて規定されると思います。コッホの時代は北里・ベーリングに始まる免疫療法の幕明けの時代でもあり、当時のジェンナーの天然痘、パストールの狂犬病、北里・ベーリングの破傷風とジフテリアにおける成功を考えた場合、コッホが結核菌を直接的に攻撃する道よりもむしろ免疫学的な道を選んだことは、原理的にはもちろん実際的にも妥当な選択だつたのではないのでしょうか。結核における免疫がいわゆる細胞性免疫であつて、体液性免疫が主役を演じている他の病気で成功したからといって結核では成功するはずもなかつた、というのは、最近10年あまりの間に得られた知識で100年前を裁くことになると思います。ましてや、コッホの選んだ道をとつたがために「一剤出で一剤去り、新薬または新薬」という状況を招いたとは一概に言い難く、結核菌に対する直接攻撃の途の上にも「新薬」の山は築かれたのであり、パス・ストマイに始まる抗結核剤の発見そのものが、あえて言えば「偶然」（莫大な数の試供品の辛抱強い trial and error）の所産であることを考えると、コッホの選んだ道を「第一ボタンのかけちがえ」と断罪するのは必ずしも当を得たこととは思えません。コッホのかけた「第一ボタン」をかけつづけたことによつて、結核感染の診断の最大の武器であるツベルク

リン反応がうみだされたこと、T細胞やマクロファージの機能の解明を核とする細胞性免疫の機構が明らかにされ、現代遺伝学の発展の基礎となつたこと、癌の免疫療法への可能性が切り開かれたこと、などは結核の治療とは直接に関連していないので今はこれ以上立ち入らないことにします。

先生が「臨床医学の科学化を推進した決定的なもの」と評価された「対照試験法」は、確かに非の打ち所なく科学的なものです。薬を主体とし人間を試験台にした薬剤またはその使用方法の薬効判定法です。また最近あちこちで唱えられている cost-benefit の論理は、一つの国や地域を対象にした結核対策の論理、つまりは政治の論理にすぎません。これらを買っている多数例の統計処理の方法論や経済性の論理は、あくまでも個を対象とする臨床(あえて臨床医学とは言いません)の方法論や論理とは次元を異にしているにもかかわらず、あまりにもストレートに臨床の場に持ちこまれてきており、このことが先生の指摘された「化学療法がブルドーザーのように押し進んでくる」という印象を作り出しているような気がします。多数例の統計学的処理の方法論で得られた結果や経済性の原理がストレートに臨床に持ちこまれるならば、先生の主張された「人間志向性」とは程遠く、結核患者は「足の生えたレントゲン写真」から「足の生えた薬効判定試験紙」に変わるにすぎないのではないのでしょうか。真の「人間志向性」の臨床は、結核菌対抗結核剤という人間抜きの観点からは生まれて来ず、結核菌対宿主のかかわりあいの多様性(宿主対抗結核剤のかかわりあいの因子も含めて)の解明の努力のなかからのみ生まれてくるのだと思います。そのためには何よりもまず、結核の免疫機構がより精密に研究されねばならず、それも単なる一般理論としてではなく個体のレベルの免疫機能が具体的に明らかにされることが必要でしょう。先生が「これからの課題」として指摘された問題点の多くは、このようにして、コッホがかけてくれた「第一ボタン」のあとを次いで着実に最後のボタンまでかけつづけることによつて解決されるのではないのでしょうか。

紙数の制限で舌足らずの点はお許し下さい。

編 集 後 記

諸先生方1981年の新春を迎えられますますますご健勝のこと大慶に存じ上げます。私も今年1月号の編集後記を書く順がまわってきました。1979年の4月号に後記を書いて以来です。この間、東京・地方合せて20人の編集委員の間を一巡したわけです。投稿論文が少ないことに各委員常々心配しながら、それでもどうか発行が続けられてきました。論文の校閲に関しては編集委員以外の諸先生にも種々ご教示を頂きました。次にこの間の編集上の若干の変化の二、三を想い出してみます。今後のご投稿のご参考になればと考えます。

× × × × ×

「結核」は、総説、原著、症例報告、総会の講演抄録、支部学会の演説抄録などが大体この順で掲載されてきております。昨年は4月号に治療専門委員会報告を号頭に掲載したこともありましたが。総説は殆んどものが編集委員会より依頼したものです。近頃は今村賞受賞者にも総説を依頼することになりました。本号の近藤瑩子先生らのものはそれにあたります。そのほかに総説用に投稿されたものもあります。後者の場合は原著のあとの順におかれたこともありましたが。特別講演やシンポジウム等は昨年からこれらの内容をできるだけ原著に近くまとめて頂くという方針から原稿枚数がかなり多くなりました。またシンポジウムについてはその内容形式を座長におまかせして各々特色を出して頂くようお願いしました。投稿規定に、掲載された論文に対する意見などを「通信」欄に掲載することがある、とあります。本号の戸井田先生のものもそれなりに興味深く読まれるものと思います。掲載された論文に対する意見、というのではありませんが昨年11月に国際非定型抗酸菌共同研究班から同班で使用する非定型抗酸菌症診断基準（暫定案）が「通信」として送られてきておりましたが、「速報」または「短報」の意味で掲載されました。これらは「通信」欄には適当しているものですが、そのほかに原著とするには簡単すぎる論文の場合に、これを「通信」欄にまたは「短報」として掲載するかどうかで委員会で何回か議せられたものもありました。「通信」欄または「短報」欄は「結核」の中身を充実させる意味で、その内容によつては気らくにもつと利用されてよい欄ではないかと思っておりますが如何がでしょうか。

× × × × ×

投稿規定に、論文は結核ならびにその周辺領域に関する学問の進歩に寄与するもの……、となつております。編集委員会でも何回かこの点が確認されております。周辺領域に関する疾患としては最近サルコイドーシスの臨床的研究の投稿があつたのみです。この他にも種々の関連疾患やそれに関する研究が私共の身近かに数多くあるはずで、結核周辺領域に関する問題も「結核」に投稿してよいということをお会員の先生方でご存知ない方が多いと思っておりますので、あえてここでも触れておきました。

投稿論文中のX線写真や組織像などは元来アート紙に載せられるべきです。その場合、従来は実費を著者負担とすることが規定に決められておりました。ところが、その1枚程度は学会でサービスすべきだという意見も編集委員の間にあり、予算上許せるならと理事会にもはかつてみました。投稿論文の少ない昨今、地方会などで発表された症例報告などで興味あるものは委員会から投稿依頼を出しております。さし当たりこのような依頼論文に限り月平均1編の見当でアート紙代を無料とすることがとり決められました。既にこの線で処理されております。

投稿規定については1980年7月号から一部改正の内容を掲げ、これに関しその号の編集後記に工藤委員から簡単に触れてもらつております。すなわち、引用文献の著者名の次に題目をつけることです。その後徐々にこの方向に改めることにしており、間もなく完全に題目がつくようになります。既にお気付きのことと思いますが、この引用文献の例示で、American Review of Respiratory Diseaseの省略語が“Am Rev Respir Dis”となつております。ピリオドも略されております。これは、同じ雑誌の119巻（1979年）1号3～10頁に掲載されているUniform Requirements for Manuscripts Submitted to Biomedical Journals—米・英・カナダの19の主な医学雑誌の委員会（International Steering Committee）がまとめたもの——を参考にしております。今後、この方向に漸次改めてゆくことになるかと思ひます。

× × × × ×

今年は結核病学会総会が5月に仙台で開かれる関係上その総会号は例年より1カ月遅れて4月に発行されます。すなわち4月号が学会プログラム（講演集）号となります。それまでに、比較的早い時期に教育委員会がまとめた「結核症の基礎知識」が号頭を飾る予定です。これを含めて3月号までは、現在投稿頂いている論文でどうか発行出来そうですが、5月号以降用の原稿はありません。このような現状ですからどうかふるつてご投稿下さいますようお願いいたします。学会が終わつてからでなくその前から原著としての原稿をご準備下さるようお願いいたします。

重ねて、ご投稿を期待しながら、「後記」を終わります。

（昭和56年1月5日 福原徳光）